仏心ある生活を！
さちあ
第2号
発行 黄檗宗青年僧の会『大阪の集い』の有志
教化布教紙研究会
霊亀山 九島禅院
〒550 大阪市西区本田3丁目4－18
TEL 06－582－5772

酒と仏教
戒は身をたすく

旧聞に属するが泥酔した高校の教師が女性ダンサーにからんで「バカ女」とののしったり、小突いたりした為に、女性ダンサーが突き放したところ、電車のホームから落ち電車に轢（ひ）かれて死亡した事件がありました。ご存知のかたも多いと思います。女性が傷害致死罪で起訴されると、世論は「正当防衛だ」「過剰防衛にあたる」などと大いに議論をよびましたが、この事件について考えてみたいと思います。仏教では、酒は不飲酒戒（ふおんじゅかい）といって五戒の一つに数えています。五戒とは、仏教徒が守るべき戒めですが、次の五つをあげています。

一　不殺生戒（ふせっしょうかい）（殺すなかれ）
二　不偸盗戒（ふゆうとうかい）（盗むなかれ）
三　不邪飲戒（ふじゃいんかい）（淫らで邪ーよこしまな性を行うなかれ）
四　不妄語戒（ふもうごかい）（嘘をつくな）
五　不飲酒戒（ふおんじゅかい）（酒を飲むなかれ）

この五つの戒めを「五戒」といいますが、五番目の「不飲酒戒」に酒は飲んではいけないとされています。

このように「五戒」は『してはならないこと』を明確に示していますが、よくみてみると、これらは守れそうにないことがわかります。人は生き物を殺さずに生きていくことは出来ません。嘘もそうです。ガン患者に対して真実を隠すこともあります。

じゃなぜ、守られないような戒を作ったのでしょうか。極端な言い方をすると『破るために戒めがある』のです。私たち凡人は、戒めを完全に守ることはできません。どうしても破戒せざるを得ません破戒はやむを得ないのです。だから、破戒せざるを得ない自分を徹底的に反省するのです。仏教では、その反省を「懺悔（さんげ）」というのです。懺悔文というお経があります。

我借所造諸悪業（がしゃくしょぞうしょあくごう）
皆由無始貪嗔癡（かいゆうむしとんしんち）
従身口意之所生（じゅうしんくいしょうしょう）
一切我今皆懺悔（いっさいがこんかいさんげ）

わたくしが昔から造ったさまざまな悪い行いは、すべて始めのない遠い過去からの貪（むさぼ）り、嗔（いか）り、癡（おろか）さによって生じたものです。そのため身体と言葉とこころから生じるすべての行為を、わたくしは、今懺悔（ざんげ）します。

この懺悔です。すなわち、自

分の犯した罪を反省し、仏のみ前にそれを告白して赦しを乞うのです。私たち凡夫がそのような懺悔をするために戒めがあるのだと私は思います。つまり、戒めを破り懺悔をせざるを得ない自分、まわりの人や生き物に迷惑をかけながら生きている自分を知って、懺悔し、周囲の人や生き物に容認を乞うのです。そして、まわりの人や生き物に感謝するのです。そして自分がそのように赦（ゆる）されているのだから、他人を赦（ゆる）さねばならぬと自覚するのです。そのような、高邁な戒の精神があるのです。

『酒は飲んでも、飲まれてはいけない』とは、よく言われることですが、この不飲酒戒の精神ー懺悔し感謝しながらお酒を飲んでおれば、この事件の高校の先生も、あたら命を落とすこともなかったのではないかと思います。最後になりましたが、亡くなった先生のご冥福をお祈りいたします。

（九島）

成道会って何？

仏教徒として欠かすことのできない最も厳（おごそ）かにとりおこなわれますのが、十二月八日の成道会（じょうどうえ）です。

成道の「道」とは菩提（さとり）のことで、「成道」とは「悟りの完成」という意味です。仏教を開かれたお釈迦さまは、人生の無常と、それから生じるいろいろな苦悩から解脱（げだつ）して、仏陀（ブッダー真理を悟った人）になられました。それを祝しての行事が成道会なのです。

仏伝によりますと、お釈迦さまは二十九歳の時に出家され、当時のインドの修行者たちが行っていた難行苦行（バラモン教の修行）を六年間も体験されましたが、それは結局、無益なことであると悟られ、その難行苦行をやめられました。そして、尼連禅河で沐浴され、村娘のスジャーターが捧げた牛乳で煮たお粥を召し上がりました。体力を回復されたのち、菩提樹の下でこの木を背にして瞑想坐禅を続けられ、三十五歳の十二月八日未明、ついに大悟され仏陀になられました。そこで、この日を毎年お釈迦さまの成道日として記念しているのです。

この日には、成道会の記念法要を行い、六年間の苦行をしのんで「出山の釈迦」像を壇上に掲げ乳粥（ちちがゆ）を供養するならわしがあります。そして、お釈迦さまの悟りにあやかるために臘八大接心を行うのです。臘八（ろうはち）とは十二月八日のことで、臘八大接心とは、十二月一日からお釈迦さまが成道された八日の朝まで、不眠不休で坐禅をすることをいいます現在も、世界各地の禅門の僧堂（専門道場）で行われています。

このように、お釈迦さまは人生の苦悩を解脱（げだつ）され、悟りを開かれたのですが、その悟りの内容こそが仏教の根本真理、つまり仏法なのです。その仏法が経典にしたためられています。

この成道会を機会に、私たちも、お釈迦さまの体験を追体験しましょう。

（仏日）

除夜の鐘

お寺の大晦日の行事といえば除夜の鐘です。十二月三十一日NHK紅白歌合戦が終わると、各地より中継で各寺院の鐘の音色が聞こえ、新しい年を迎えます。新年を迎えるにあたり旧年中の人の心の中にひそむ多くの煩悩を追い出す行事が、除夜の鐘です。

一般に梵鐘は、除夜の鐘も含めて、百八ツの煩悩を断ち切る意味が込められているといわれています。除夜の鐘の名も煩悩を『除く鐘』からきています。

煩悩は百八ツあるといわれています。その数え方には、三つの説があります。最も分かりやすいものは、六根（ろっこんー眼・耳・鼻・舌・身・意ー）という人間の諸機能が、六境（ろっきょうー色・声・香・味・触・法ー）という対象に出会ったときに、好

黄檗山の年越し

○臘八（ろうはつ）○

修行道場の一年間のうちで最も重要で厳しい行事は「臘八大接心」です。臘月（ろうげつ―陰暦十二月）八日に、お釈迦さまが悟りを開かれたのを記念して坐禅に明け暮れるのです。

十一月三十日の夜、黄檗山では全山の僧侶、有縁の居士大姉が一同に会し、一服のお茶をいただいて、これから一週間の精進を確認します。指導者は「一週間も一日と思うなら、一日の徹夜など何のことはない。不眠不休で坐禅修行励むように」との訓示をします。この一週間、床はひかず、わずかに深夜から三時すぎまで坐禅できるだけなのです。先輩雲水は、新人雲水を警策（けいさく）でビシビシとたたきます。背中は赤く張れ上がり、歩くと肩がユサユサと動くのが分かります。その時ばかりは先輩雲水が鬼軍曹に見えたものです。でも今思えば、大切な自分の坐禅時間を我々のために使ってもらっているのだから感謝申し上げています。

萬福寺山門

いよいよ十二月八日の朝方群青色のまだ夜が明けきらぬ空に『明の明星』が輝き、二千五百年の昔、お釈迦さまもこの星を見て「あそこに私が光っている」とおっしゃられたのです。その星を私が見ている、生きていてよかったとつくづく思ったものです。

雲ひとつない寒風の中『明の明星』は、まばたきもせず私に皆と同じだけの光りをなげかけてくれていました。

○冬至冬夜○

冬至の前夜は、「新到三年白歯を見せず」という厳格な一年を過ごす雲水たちにとって特別な一日です。雲水が本山役員の老僧方から典座（てんぞう―台所―）のおばさん営繕のおじさん、出入り商人の米屋、八百屋、植木屋、石屋さんまでご招待して、大酒会となるのです。この日ばかりは無礼講で、単の上下や新旧の秩序を吹き飛ばし、雲水たちはいろいろと趣向をこらして、劇をしたり、歌ったりそれはそれはにぎやかな一日です。

○年末年始○

師走、雲水も正月に向けて準備に忙しい。本堂のすす払い。裏山に入り、裏白を取りにいく。違えてただのシダを取って帰り、先輩雲水にお目玉を頂戴する。朝の三時ごろから湯を沸かしてもちつき。（よいこと）・悪（いやなこと）・平（なんともないこと）の三つの受け取り方があって、これが十八。この十八に染（ぜんーけがれー）と浄（じょうー清らかー）があり、十八が二倍となり三十六。それが、過去・現在・未来の三時に分かれて、百八の煩悩となる、というものです。

こんにち、戦争でなくなった梵鐘も再鋳され、毎日町々で突かれていますが、なかには、夜や早朝の鐘は音の公害だと指摘されつつあるそうです。

当寺も昭和四十三年に梵鐘を再鋳し、現在まで、毎夜九時に五声を打ち、地域の方々から『みおつくしの鐘』と親しまれています。

年末の除夜の鐘には、早くから若い人達も大勢お越しになり、二百人くらいで突かれています。皆さま方もテレビの鐘でなく、お寺に参拝され「この一年、何事もなく過ごせたこと」を家族そろって感謝し、新しい年をお迎え下さい。

（常休）

〔編集後記〕

西へ東へ、猫の手も借りたい正月支度です。

そしていよいよ大晦日。除夜の鐘。黄檗山では参拝の人々に百八つのバックナンバー入りの達磨を配り、年越しそばを振る舞います。思わぬ寺からの布施行に、参拝者はこころよく新年を迎えられるようです。本堂では新年を迎えると大般若のおつとめが始まります。六百巻の経文をバラバラと繰り、世界の平和を祈念するのです。この正月の法要は修正会（しゅしょうえ）といいますが、自分の過ちを懺悔し、生き方の方向修正をする時なのです。様々な法要が続き、三日の開山忌でもって正月の行事は終わります。

その後、大般若のお札を有縁の方々にお配りして、帰省が許されるのです。

（自敬）

○巷にジングルベルの音楽がながれ、気忙しくなってくるのが、十二月です。今月は本文中にもあるように、お釈迦さまが悟りを開かれた、仏教徒にとっては、大事な月ですが、あまり知られていないのは残念なことです。

二月十三日のバレンタインデーにチョコレートを贈る風習が定着していますが、十二月八日に村娘スジャータが乳粥をお釈迦さまに供養した故事になぞらえて、女性から男性に牛乳を贈るようになればスーパーの牛乳パックに押されて困っておられる牛乳屋さんも大助かりになるなどと馬鹿なことを考えたりしています。

○なにはともあれ、第2号ができあがりました。今回は教化布教紙研究会の会員寺院が分担して、記事を書きました。いずれ、またの機会に詳しく紹介することにしますが、現在の会員寺院は以下のとおりです。

（九島）大阪市西区本田三ー四ー十八
☎（06）582ー5772
霊亀山　九島禅院

（仏日）池田市畑一ー十八ー十七
☎（0727）53ー2567
摩耶山　仏日禅寺

（常休）伊丹市中野北二ー十一ー五
☎（0727）77ー2922
法雄山　常休禅寺

（自敬）大阪市淀川区西三国二ー十二ー四十三
☎（06）391ー5348
東向山　自敬禅寺

（編集子）

仏教よもやま話①

お釈迦さん

「お釈迦」という俗語があります。なにか物がこわれたり、造りそこなったりしたときに「お釈迦になる」と言ったり、不良品のことを「お釈迦」と言います。お釈迦さまには、誠に失礼な話ですが、どうしてそんな呼び名をするのでしょうか。お釈迦さまの弟子として、解明したいと思いますじつは「お釈迦」の語源は、江戸の鋳物師（いものし）のあーらしいのです。鋳物いだの符牒ーふちょう鋳物が とてもむずかしいを造るには、火かげが強すぎると、鋳物と言います。とくに火で、鋳物師たちはがダメになります。そった」などと言いま失敗すると「火が強かす。ところが、江戸っ子は「ひ」の発音が苦手で「ひ」が「し」になってしまいます。江戸っ子に発音させると、「ヒコーキ」が「シコーキ」「火を」が「塩」、「アサヒ新聞」が「アサシ新聞」になってしまいます。そこで、この「火が強かった」が「しがつよかった」・・「四月八日（しがつようか）」となるのです。となると四月八日はお釈迦さまの誕生日ですから、「お釈迦」となるのです嘘のような本当の話ですが、同じような語源から、「友びき」など、さまざまな俗信や迷信のたぐいが出来あがったのです。このコーナーで、引き続き取り上げたいと思います。

（編集子）

中国吸玉療法 ― はり・きゅう ―

金禅寺鍼灸院

豊中市本町五丁目3－64　金禅寺内
TEL（06）849－3639
阪急宝塚線豊中駅東口下車・徒歩約500m
診療日（月・火・水曜日　午前10時～午後4時）

院長の浅野英俊師は、大本山万福寺で長年修行され、その傍ら中国鍼灸術を学ばれました。